



大学生における女性の描かれた絵画の印象評価： 色彩と人物の表情の比較を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2024-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 知恩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000087

大学生における女性の描かれた絵画の印象評価

— 色彩と人物の表情の比較を中心に —

李 知 恩

北海道教育大学札幌校デザイン研究室

Impression of Paintings Depicting Women among University Students

— Comparison in Color and Facial Expressions —

LEE Jieun

Department of Art Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本研究は、大学生が絵画鑑賞を一般的に難しいと感じ、自身の理想的なそれに到達することに戸惑いを抱えているのではという疑問から出発した。この研究では、女性が描かれた絵画を対象にし、「色を残して人物の表情が見えない」場合と「色が無いモノクロの表情が見える」場合に分けて、大学生を対象に18項目の形容詞を用いて印象評価を行った。その結果、大学生は色彩よりも顔の表情を重視し、最も印象的だと捉えている尺度は「可愛らしさ」であり、次に「女性的」「繊細な」項目と関連していることが確認できた。同時に大学生の絵画鑑賞は、登場人物の性別、表情、ポーズ、小物などの情報に焦点が集まる傾向が再確認された。一方、刺激材料の後に提示した原作に対して大学生が高い評価を示す傾向と、「可愛い」「女性的」「繊細な」以外にも、「明るい」「暖かい」「楽しい」「柔らかな」といった要素に入っていることから大学生が鑑賞をする際に、単に一つの感情にとらわれることなく、幅広く繊細に感じ取る可能性が示唆された。

I はじめに

一般に、絵画鑑賞は個人の感性や好みに基づいて楽しむことができると言われるが、大学生たちは絵画鑑賞を難しいと感じている。つまり、大学生は絵画には膨大な情報量(社会的・歴史的背景、

作家の思想・精神性、構成要素など)が秘められていることを理解し、自身の価値観(好み)や感性(美意識)による鑑賞が望ましいと理解しているものの、実際の絵画に出会うと、どこから見れば良いのか、どのように感じれば良いのか情報解析に戸惑いを感じていると言える。そこで、先行

研究¹で絵画における色彩と人物の表情による好感度を調べた結果、「色を残して人物の表情が見えない」の刺激材料より「色が無いモノクロの表情が見える」の刺激材料が好きで、良く、美しく、快く²感じ、大学生は色彩より人物の表情を重視することが明らかになった。

本研究では、大学生の絵画に対する好感度に影響を与える要因を明らかにするため、「色を残して人物の表情が見えない」と「色が無いモノクロの表情が見える」絵画を刺激材料として使用し、先行研究および予備研究に基づいて選定した形容詞を用いて印象評価を行った。

Ⅱ 調 査

2.1 調査に用いる題材

本調査では、美術教科書の表紙に選ばれた絵画を調査対象とした。具体的には、1作目に「ヴィジェ・ルブラン1790年フィレンツェで描かれた自画像」、2作目に「ピアノに寄る少女たち」、3作目に「真珠の耳飾りの少女」を選定³した。これらをA（有色，表情無し）群とB（無色，表情有り）⁴群に分け、A群ではAと元の作品の順序、B

表1 刺激材料(教科書の表紙として使用された作品)

	A (有色, 表情無し)	C (Aの後の原作)	B (無色, 表情有り)	D (Bの後の原作)
1	ヴィジェ・ルブラン1790年フィレンツェで描かれた自画像 (ヴィジェ・ルブラン)			
				
2	ピアノに寄る少女たち (ピエール・オーギュスト・ルノワール)			
				
3	真珠の耳飾りの少女 (ヨハネス・フェルメール)			
				

群ではBと元の作品の順序で提示する形で、合計6回の調査を実施した。

2.2 調査に用いる形容詞対尺度

長潔他（2013）の「絵画印象を評定する形容詞対尺度⁵」を基に、予備調査を実施、最終的に質

- 1 アジア基礎造形連合学会2023札幌大会に投稿中。9月2日発表予定。
- 2 全ての刺激材料において参加者間1要因分散分析を行ったところ、「好き」($F_{(3, 1954)} = 6.03, p < .01$)「良い」($F_{(3, 1954)} = 15.23, p < .01$)「美しい」($F_{(3, 1954)} = 23.28, p < .01$)「快い」($F_{(3, 1954)} = 23.28, p < .01$)と全てにおいて有意差が見られ、「色を残して人物の表情が見えない」刺激材料より「色が無いモノクロの表情が見える」刺激材料が好きで、快く、美しく、快く感じた。
- 3 作品1はヴィジェ・ルブラン1790年フィレンツェで描かれた自画像で日本文教出版/高校美術3の表紙(平成28年)、作品2はピアノに寄る少女たち(ピエール・オーギュスト・ルノワール)で日本文教出版/中学校美術1の表紙(平成18年)、作品3は真珠の耳飾りの少女(ヨハネス・フェルメール)で日本文教出版/中学校美術1の表紙(平成28年)に使用された。
- 4 A(有色, 表情無し)は原作から人物の表情が見えないようにAdobe Illustratorのメニューバー>効果>アーティスティック>パレットナイフを用いて処理し

た(ストロークの大きさ12, 正確さ3)。B(無色, 表情有り)は元の絵画から色を無くすためにAdobe Photoshopのメニューバー>イメージ>モード>グレースケールを用いて処理した。

- 5 長潔容江他, 「絵画印象の研究における形容詞対尺度構成の検討」久留米大学心理学研究, 2013

絵画印象について研究された論文の中から、14本の論文を採択し分析した結果、絵画印象は、活動性(12項目: 安定な-不安定な, 興奮的-沈静的, 動的-静的, 個性的な-平凡な, まとまった-ばらばらな, 男性的-女性的, 感情的-理知的, 強い-弱い, 健康な-不健康な, 古い-新しい, 大人っぽい-子供っぽい, 派手な-地味な)明るさ(8項目: 明るい-暗い, 楽しい-寂しい, 表面的-深みのある, 暖かい-冷たい, 重い-軽い, 単純な-複雑な, 神経的な-神経質的ではない, 陽気な-陰気な)評定性(4項目: 美しい-

表2 因子別の形容詞（14項目）

活動性	明るさ	やわらかさ	その他
動的 不安定な 個性的な 派手な	明るい 陽気な 暖かい 楽しい	ゆるんだ 穏やかな 柔らかな	女性的 繊細 可愛らしい

問紙に使用する形容詞⁶を評定尺度として抽出し、先行研究の調査項目である評定性因子を除き、表2に示した。

2.3 調査方法

調査では形容詞対尺度を用いてA群とB群に分けて5件法の調査にて合計6回の印象評価を行った。「A色を残して人物の表情が見えない」と「B色がないモノクロの表情が見える」の相違について求め、さらに、刺激材料毎に原作との相違についても求めた。

2.4 調査参加者

本調査の調査参加者は教員養成課程の大学生あ

り、以下のように合計6回の調査を実施した。

1回目5月13日82名（男性38名、女性44名、平均年齢20.35歳、標準偏差0.77）

2回目5月13日82名（男性40名、女性42名、平均年齢20.34歳、標準偏差0.67）

3回目5月20日78名（男性36名、女性42名、平均年齢20.41歳、標準偏差0.82）

4回目5月20日83名（男性38名、女性41名、平均年齢20.34歳、標準偏差0.61）

5回目5月27日77名（男性37名、女性40名、平均年齢20.48歳、標準偏差0.88）

6回目5月27日77名（男性35名、女性42名、平均年齢20.40歳、標準偏差0.78）

2.5 調査結果

まず、調査に用いる形容詞対尺度18項目の中で、先行研究で分析を行った好感度を示す評定性因子（好き、良い、美しい、快い）以外の14項目における平均値・標準偏差を求めたものを表3から16までに示した。

表3 作品別の「静的」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.07	0.98	2.78	1.27	3.28	1.23	2.76	1.20	$F_{(3, 324)} = 3.67, p < .05$
2	2.49	1.12	2.58	1.13	3.26	1.24	2.55	1.15	$F_{(3, 318)} = 7.44, p < .01$
3	3.55	1.12	3.49	1.12	4.12	0.82	3.38	1.06	$F_{(3, 304)} = 7.68, p < .01$
All	3.02	1.24	2.92	1.25	3.54	1.19	2.89	1.19	$F_{(3, 954)} = 14.82, p < .01$

表4 作品別の「安定した」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.01	1.28	3.68	1.20	3.48	1.07	3.61	0.97	$F_{(3, 324)} = 5.67, p < .01$
2	2.76	1.10	3.63	0.95	3.54	0.90	3.35	1.06	$F_{(3, 318)} = 12.19, p < .01$
3	2.86	1.14	3.97	0.93	3.75	0.96	3.95	0.75	$F_{(3, 304)} = 23.23, p < .01$
All	2.88	1.18	3.76	1.05	3.59	0.99	3.63	0.97	$F_{(3, 954)} = 34.47, p < .01$

醜い、面白い-つまらない、良い-悪い、好き-嫌い）
やわらかさ（3項目：柔らかな-固い、ゆるんだ-緊張した、鋭い-鈍い）で評定した。

6 本調査では以上の27項目中から人物を主にした予備調査で統計的有意差が見られなかった項目を省き、活動性4項目（動的、不安定な、個性的な、派手な）、明

明るさ4項目（明るい、陽気な、暖かい、楽しい）、評定性4項目（良い、美しい、好き、快い）、やわらかさ4項目（ゆるんだ、くつろいだ、穏やかな、柔らかな）とし、その他に予備研究で差が見られた女性的、繊細な、可愛らしさの3項目を追加して実施した。

表5 作品別の「個性的な」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.27	1.15	3.28	1.16	2.44	0.98	2.65	1.06	$F_{(3, 324)} = 12.66, p < .01$
2	2.96	1.05	2.75	1.04	2.37	0.98	2.85	1.09	$F_{(3, 318)} = 4.77, p < .01$
3	2.99	1.00	3.00	0.98	2.78	1.11	3.12	1.19	$F_{(3, 304)} = 1.30, ns$
All	3.07	1.08	3.01	1.09	2.53	1.04	2.87	1.13	$F_{(3, 954)} = 12.02, p < .01$

表6 作品別の「派手な」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	2.90	1.32	3.24	1.25	2.20	1.06	3.00	1.16	$F_{(3, 324)} = 11.39, p < .05$
2	3.00	1.03	3.16	1.12	1.96	0.94	3.17	1.13	$F_{(3, 318)} = 23.19, p < .01$
3	2.29	0.94	2.48	1.00	2.01	1.03	3.03	1.10	$F_{(3, 304)} = 13.46, p < .01$
All	2.74	1.15	2.97	1.18	2.06	1.02	3.06	1.13	$F_{(3, 954)} = 38.60, p < .01$

表7 作品別の「明るい」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.18	1.18	3.57	0.99	2.77	1.19	4.01	0.83	$F_{(3, 324)} = 20.46, p < .05$
2	4.10	0.83	4.25	0.86	2.79	1.28	4.29	0.64	$F_{(3, 318)} = 45.71, p < .01$
3	2.40	1.02	3.09	1.10	1.97	0.98	3.71	0.94	$F_{(3, 304)} = 43.67, p < .01$
All	3.25	1.23	3.65	1.09	2.52	1.22	4.01	0.85	$F_{(3, 954)} = 20.05, p < .01$

表8 作品別の「陽気な」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.22	1.22	3.60	0.99	2.87	1.19	3.63	0.99	$F_{(3, 324)} = 8.71, p < .01$
2	3.80	1.03	3.99	1.02	2.82	1.16	4.10	0.87	$F_{(3, 318)} = 25.16, p < .01$
3	2.03	0.85	2.62	0.98	1.91	0.82	3.06	1.10	$F_{(3, 304)} = 24.76, p < .01$
All	3.04	1.28	3.42	1.15	2.54	1.16	3.60	1.08	$F_{(3, 954)} = 38.38, p < .01$

表9 作品別の「暖かい」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.84	0.82	4.02	0.81	2.72	1.14	4.27	0.70	$F_{(3, 324)} = 48.83, p < .01$
2	4.28	0.84	4.31	0.85	3.31	1.12	4.44	0.69	$F_{(3, 318)} = 26.73, p < .01$
3	2.48	1.05	2.86	1.03	2.04	0.90	3.39	1.06	$F_{(3, 304)} = 24.34, p < .01$
All	3.55	1.03	3.59	0.95	2.99	1.02	3.79	0.98	$F_{(3, 954)} = 65.06, p < .01$

表10 作品別の「楽しい」項目の平均値と標準偏差

	A(有色, 表情無し)		C(Aの後の原作)		B(無色, 表情有り)		D(Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.55	1.03	3.59	0.95	2.99	1.02	3.79	0.98	$F_{(3, 324)} = 9.71, p < .01$
2	3.89	1.01	4.08	0.93	3.56	1.05	4.21	0.67	$F_{(3, 318)} = 7.07, p < .01$
3	2.13	0.94	2.56	0.96	2.18	0.85	3.03	0.99	$F_{(3, 304)} = 14.84, p < .01$
All	3.21	1.25	3.43	1.14	2.92	1.13	3.68	1.02	$F_{(3, 954)} = 19.26, p < .01$

表11 作品別の「ゆるんだ」項目の平均値と標準偏差

	A (有色, 表情無し)		C (Aの後の原作)		B (無色, 表情有り)		D (Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.56	0.95	3.45	1.01	2.59	0.90	3.13	1.06	$F_{(3, 324)} = 16.10, p < .01$
2	3.77	0.88	3.42	1.08	3.09	1.05	3.44	1.07	$F_{(3, 318)} = 5.89, p < .01$
3	2.82	1.15	2.92	1.04	2.42	1.01	2.97	0.95	$F_{(3, 304)} = 4.49, p < .01$
All	3.40	1.08	3.27	1.07	2.70	1.03	3.18	1.05	$F_{(3, 954)} = 20.05, p < .01$

表12 作品別の「穏やかな」項目の平均値と標準偏差

	A (有色, 表情無し)		C (Aの後の原作)		B (無色, 表情有り)		D (Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.94	0.87	4.18	0.80	3.73	0.88	4.00	0.92	$F_{(3, 324)} = 3.69, p < .05$
2	4.04	0.92	4.07	0.82	3.94	0.88	4.01	0.81	$F_{(3, 318)} = 0.36, ns$
3	3.34	1.14	3.81	0.95	3.14	1.14	3.66	0.99	$F_{(3, 304)} = 6.19, p < .01$
All	3.78	1.03	4.02	0.87	3.61	1.03	3.89	0.92	$F_{(3, 954)} = 8.01, p < .01$

表13 作品別の「柔らかな」項目の平均値と標準偏差

	A (有色, 表情無し)		C (Aの後の原作)		B (無色, 表情有り)		D (Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	4.10	0.88	4.18	0.87	3.76	0.90	4.17	0.79	$F_{(3, 324)} = 4.38, p < .01$
2	4.05	0.90	4.04	0.95	3.96	0.90	4.19	0.73	$F_{(3, 318)} = 0.93, ns$
3	3.30	1.24	3.86	0.98	3.06	1.11	3.96	0.86	$F_{(3, 304)} = 12.77, p < .01$
All	3.83	1.08	4.03	0.94	3.60	1.05	4.11	0.80	$F_{(3, 954)} = 13.05, p < .01$

表14 作品別の「女性的」項目の平均値と標準偏差

	A (有色, 表情無し)		C (Aの後の原作)		B (無色, 表情有り)		D (Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	4.56	0.66	4.65	0.65	4.62	0.64	4.66	0.61	$F_{(3, 324)} = 0.37, ns$
2	4.11	0.93	4.35	0.75	4.27	0.71	4.31	0.82	$F_{(3, 318)} = 1.38, ns$
3	3.64	1.19	4.29	0.94	3.94	1.04	4.26	0.69	$F_{(3, 304)} = 7.41, p < .01$
All	4.11	1.02	4.43	0.80	4.28	0.86	4.41	0.73	$F_{(3, 954)} = 7.05, p < .01$

表15 作品別の「繊細な」項目の平均値と標準偏差

	A (有色, 表情無し)		C (Aの後の原作)		B (無色, 表情有り)		D (Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.06	1.26	4.38	0.89	4.49	0.70	4.43	0.72	$F_{(3, 324)} = 44.95, p < .01$
2	2.66	1.09	4.11	0.91	4.03	0.82	3.87	0.88	$F_{(3, 318)} = 42.96, p < .01$
3	2.48	1.19	4.09	0.96	3.53	1.01	3.91	0.86	$F_{(3, 304)} = 38.55, p < .01$
All	2.74	1.21	4.19	0.93	4.03	0.94	4.08	0.86	$F_{(3, 954)} = 113.95, p < .01$

表16 作品別の「可愛らしい」項目の平均値と標準偏差

	A (有色, 表情無し)		C (Aの後の原作)		B (無色, 表情有り)		D (Bの後の原作)		被験者間1要因分散分析
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
1	3.40	1.11	4.07	1.11	4.01	0.88	4.27	0.80	$F_{(3, 324)} = 11.67, p < .01$
2	3.81	0.99	3.99	1.04	3.94	0.82	4.26	0.82	$F_{(3, 318)} = 3.28, p < .05$
3	2.74	1.10	3.79	1.01	3.29	1.06	3.91	0.98	$F_{(3, 304)} = 20.17, p < .01$
All	3.33	1.15	3.95	1.06	3.75	0.98	4.15	0.89	$F_{(3, 954)} = 27.90, p < .01$

まず、調査の妥当性を検討するために2群に分けて調査を行った原作C (Aの後に提示した原作) と原作D (Bの後に提示した原作) の全ての形容詞項目別に被験者間1要因分散分析を行った。

その結果、14項目のうち明るさ因子の「明るい」($F_{(1, 477)} = 15.74, p < .01$)、「陽気な」($F_{(1, 477)} = 3.18, p < .10$)、「暖かい」($F_{(1, 477)} = 9.30, p < .01$)、「楽しい」($F_{(1, 477)} = 6.36, p < .05$)の4項目、その他の「可愛らしさ」($F_{(1, 477)} = 4.65, p < .05$)の5項目に有意差が見られ、CよりDの平均得点が高かった。明るさ因子である「明るい」「陽気な」「暖かい」「楽しい」という4項目については、色のないモノクロの絵画を見た後に色のある原作を見ると、ギャップを大きく感じるのは自然な現象であると理解できた。このことから調査の妥当性が得られたと言える。そこで、意外性を示した「可愛らしさ」については、本調査において特筆すべき項目とした。因みに評定性因子の中では「快い」($F_{(1, 477)} = 6.70, p < .05$)でも同様の結果が見られた。

表に示した形容詞対尺度ごとに刺激材料において平均得点に統計的有意差があるか調べるために1要因参加者間分散分析を行った結果は以下の通りである。

静的(表3)ではB(無色, 表情有り)が最も高く、他の項目の間には統計的有意差がなかった。安定した(表4)ではA(有色, 表情無し)が最も低く、他の項目の間には統計的有意差がなかった。個性的(表5)、派手な(表6)ではB(無色, 表情有り)が最も低く、他の項目の間には統計的有意差がなかった。明るい(表7)、陽気な(表8)、暖かい(表9)、楽しい(表10)ではB(無色, 表情有り)が最も低く、Bの後に評価した原作が最も平均得点が高い結果となった。ゆるんだ(表11)ではB(無色, 表情有り)が最も低く、A(有色, 表情無し)が絵画1と絵画2では最も高かった。穏やかな(表12)、柔らかな(表13)では絵画2では全ての刺激材料の間に統計的有意差がなかったが、絵画1と絵画3ではB(無色, 表情有り)が最も低かった。女性的(表14)では絵画1

と絵画2では全ての刺激材料間に統計的有意差がなかったが、絵画3ではA(有色, 表情無し)が最も低く、Bの後に評価した原作が最も高かった。繊細な(表15)ではA(有色, 表情無し)が最も低く、他の項目の間には統計的有意差がなかったが、絵画3のみAの後に評価した原作が最も高かった。可愛らしい(表16)でもA(有色, 表情無し)が最も低く、他の項目の間には統計的有意差がなかったが、絵画3のみBの後に評価した原作が最も高かった。

まとめると、B(無色, 表情有り)に比べてA(有色, 表情無し)は「個性的」「派手な」「明るい」「陽気な」「暖かい」「楽しい」「ゆるんだ」「穏やかな」「柔らかな」と感じA(有色, 表情無し)に比べてB(無色, 表情有り)は「静的」「安定した」「女性的」「繊細な」「可愛らしい」と評価していることが分かった。この結果は同一の刺激材料を用いた先行研究で、評定性因子の全ての項目において、A(有色, 表情無し)に比べてB(無色, 表情有り)が好きで、快く、美しく、快く感じていたことから「静的」「安定した」「女性的」「繊細な」「可愛らしい」の5つの項目と評定性因子の4つの項目が深く関わっている可能性があると考えられる。そこで、今回の調査に用いた形容詞対尺度に性別を加えて相関関係を調べ、表17に示した。

相関を調べた結果、評定性因子の「好き」は同じ因子内の全ての形容詞と強い相関があり、その他に「可愛らしい」(相関係数 $r = 0.523$)と相関が最も強く、「柔らかな」(相関係数 $r = 0.428$)でやや強い相関があった。「良い」も同じ因子内の全ての形容詞と強い相関があり、その他に「可愛らしい」(相関係数 $r = 0.505$)と「柔らかな」(相関係数 $r = 0.506$)と相関が最も強く、「女性的」(相関係数 $r = 0.459$)「穏やかな」(相関係数 $r = 0.452$)「暖かい」(相関係数 $r = 0.405$)でやや強い相関があった。「快い」も同じ因子内の全ての形容詞と強い相関があり、その他に「可愛らしい」(相関係数 $r = 0.466$)「柔らかな」(相関係数 $r = 0.471$)「穏やかな」(相関係数 $r = 0.436$)「明るい」(相

関係数 $r=0.458$ 「暖かい」(相関係数 $r=0.428$) 「楽しい」(相関係数 $r=0.473$) でやや強い相関があった。

一方「美しい」も同じ因子内の全ての形容詞と強い相関があり、その他に「繊細な」(相関係

数 $r=0.531$) 「女性的」(相関係数 $r=0.569$) と相関が最も強く、「可愛い」(相関係数 $r=0.469$) 「柔らかな」(相関係数 $r=0.434$) でやや強い相関があった。

表17 「好き、良い」を含む形容詞18項目と性別との相関

	静的	安定した	個性的な	派手な	明るい	陽気な	暖かい	美しい	良い	美しい	好き	快い	ゆるんだ	穏やかな	柔らかな	女性的	繊細な	可愛い	性別
静的	-	0.387 **	0.034 ns	-0.223 **	-0.292 **	-0.333 **	-0.257 **	-0.285 **	0.048 ns	0.088 **	0.043 ns	-0.013 ns	-0.041 ns	0.015 ns	-0.008 ns	0.012 ns	0.058	-0.053 ns	0.050 ns
安定した		-	0.058	-0.042 ns	0.100 **	-0.001 ns	0.069 *	0.026 ns	0.325 **	0.341 **	0.277 **	0.300 **	0.004 ns	0.217 **	0.230 **	0.236 **	0.354 **	0.266 **	0.018 ns
個性的な			-	0.407 **	0.138 **	0.109 **	0.041 ns	0.06	0.085 **	-0.038 ns	0.069 *	0.038 ns	0.104 **	0.018 ns	0.049 ns	0.043 ns	-0.034 ns	0.097 **	-0.084 *
派手な				-	0.473 **	0.448 **	-0.307 **	-0.332 **	0.092 **	-0.024 ns	0.083 *	0.155 **	0.193 **	0.032 ns	0.077 *	0.031 ns	0.035 ns	0.199 **	-0.104 *
明るい					-	0.697 **	0.655 **	0.606 **	0.355 **	0.183 **	0.236 **	0.458 **	0.348 **	0.336 **	0.363 **	0.218 **	0.214 **	0.408 **	0.008 ns
陽気な							-	0.590 **	0.688 **	0.295 **	0.127 **	0.225 **	0.398 **	0.322 **	0.265 **	0.294 **	0.188 **	0.129 **	0.377 **
暖かい									-	0.615 **	0.405 **	0.229 **	0.278 **	0.428 **	0.420 **	0.454 **	0.476 **	0.281 **	0.150 **
美しい										-	0.393 **	0.211 **	0.309 **	0.473 **	0.350 **	0.334 **	0.361 **	0.243 **	0.203 **
良い											-	0.584 **	0.630 **	0.533 **	0.200 **	0.452 **	0.506 **	0.459 **	0.355 **
美しい												-	0.594 **	0.488 **	0.059	0.376 **	0.434 **	0.569 **	0.531 **
好き													-	0.627 **	0.176 **	0.348 **	0.428 **	0.377 **	0.350 **
快い														-	0.327 **	0.436 **	0.471 **	0.348 **	0.348 **
ゆるんだ															-	0.430 **	0.408 **	0.197 **	0.000 ns
穏やかな																-	0.694 **	0.437 **	0.250 **
柔らかな																	-	0.502 **	0.306 **
女性的																		-	0.494 **
繊細な																			-
可愛い																			-
性別																			-

以上のことから女性が描かれた絵画を刺激材料とした今回の調査では、好感度を表す評定性因子と最も強く関わっているのは「可愛い」項目であり、その次に「柔らかな」であった。また、「可愛い」は評定性因子以外に「女性的」(相関係数 $r=0.544$) と相関が最も強く、「明るい」(相関係数 $r=0.408$) 「暖かい」(相関係数 $r=0.426$) 「楽しい」(相関係数 $r=0.412$) 「柔らかな」(相関係数 $r=0.477$) 「繊細な」(相関係数 $r=0.458$) とやや強い相関があった。

男女の間では「好き」「良い」「快い」について、女子学生が男子学生より高く評価する傾向が見られた。この傾向は、2017年に行われた先行調査とも一致する⁷。一方、男子学生が女子学生より「個

性的」「派手な」「ゆるんだ」「女性的」と感じる傾向が見られた。

そのほか、調査群ごとの被験者内分散分析では A (有色, 表情無し) と原作の場合、動的 ($F_{(1, 241)} = 1.36, ns$) 個性的な ($F_{(1, 241)} = 0.72, ns$) ゆるんだ ($F_{(1, 241)} = 2.67, ns$) の3項目のみ有意差が無く、安定した ($F_{(1, 241)} = 100.06, p < .01$) 派手な ($F_{(1, 241)} = 10.24, p < .01$) 明るい ($F_{(1, 241)} = 33.88, p < .01$) 陽気な ($F_{(1, 241)} = 28.78, p < .01$) 暖かい ($F_{(1, 241)} = 10.38, p < .01$) 楽しい ($F_{(1, 241)} = 10.32, p < .01$) 穏やかな ($F_{(1, 241)} = 13.20, p < .01$) 柔らかな ($F_{(1, 241)} = 8.10, p < .01$) 女性的 ($F_{(1,$

7 李他 (2019) による先行研究では、2017年に教員養成課程の大学生101名を対象に、「図工で思い浮かイメー

ジ」について調査が行われた結果、女子学生は男子学生よりも面白くて楽しいと感じる傾向があり、女子学生は鑑賞する間に考え方が変化し、さまざまな作品を楽しむことがわかった。

$_{241}) = 34.63, p < .01$) 繊細な ($F_{(1, 241)} = 291.01, p < .01$) 可愛らしい ($F_{(1, 241)} = 74.50, p < .01$) に有意差が見られた。一方、B (無色, 表情有り) と原作の場合, 安定した ($F_{(1, 236)} = 0.41, ns$), 繊細な ($F_{(1, 236)} = 0.77, ns$) の3項目のみ有意差が無く, 動的 ($F_{(1, 236)} = 67.27, p < .01$) 個性的な ($F_{(1, 236)} = 25.59, p < .01$) 派手な ($F_{(1, 236)} = 157.38, p < .01$) 明るい ($F_{(1, 236)} = 256.78, p < .01$) 陽気な ($F_{(1, 236)} = 151.26, p < .01$) 暖かい ($F_{(1, 236)} = 272.67, p < .01$) 楽しい ($F_{(1, 236)} = 95.73, p < .01$) ゆるんだ ($F_{(1, 236)} = 45.85, p < .01$) 穏やかな ($F_{(1, 236)} = 14.37, p < .01$) 柔らかな ($F_{(1, 236)} = 51.84, p < .01$) 女性的 ($F_{(1, 236)} = 7.09, p < .01$) 可愛らしい ($F_{(1, 236)} = 59.16, p < .01$) に有意差が見られた。

Ⅲ 考 察

この調査では, 大学生を対象に女性が描かれた絵画を刺激材料として「色を残して人物の表情が見えない」と「色が無いモノクロの表情が見える」に分けて印象評価を行った。その結果, 「色を残して人物の表情が見えない」の刺激材料は「個性的」「派手な」「明るい」「陽気な」「暖かい」「楽しい」「ゆるんだ」「穏やかな」「柔らかな」と感じ, 「色が無いモノクロの表情が見える」の刺激材料は「静的」「安定した」「女性的」「繊細な」「可愛らしい」という印象を持っていた。

同一の刺激材料を用いた評定性因子の全てにおいても「色を残して人物の表情が見えない」に比べて「色が無いモノクロの表情が見える」が好まれたことから調査に用いた全ての形容詞に性別を加えて相関関係を調べた。その結果, 評定性因子と最も強く関わっている形容詞は「可愛らしい」であり, その次が「柔らかな」であることが判明した。そこで, 「可愛らしい」の相関を調べたところ, 評定性因子以外に「女性的」との相関が最も強く, 「明るい」「暖かい」「楽しい」「繊細な」でやや強い相関があった。

しかし, 「色を残して人物の表情が見えない」

と「色が無いモノクロの表情が見える」に比べてその後提示した原作が2群とも高い評価が得られたこと, さらに今回最も影響を及ぼしている「可愛らしい」項目が「女性的」「明るい」「暖かい」「楽しい」「柔らかな」「繊細な」項目と相関関係があることに注目すると, 大学生は「可愛らしい」の次に「明るい」「暖かい」「楽しい」「柔らかな」項目も求めているという可能性が見られた。

Ⅳ おわりに

本研究は, 大学生が絵画鑑賞を行う際に, 自身が理想としている, 自身の価値観 (好み) や感性 (美意識) による鑑賞に至らず, どこから見れば良いのか, どのように感じれば良いのか, 作品から得た情報解析に戸惑いを感じているのではないかと, という疑問から出発した。

本調査では大学生を対象に女性が描かれた絵画を刺激材料とし「色を残して人物の表情が見えない」場合と「色が無いモノクロの表情が見える」場合に分けて印象評価を行った結果, 「色を残して人物の表情が見えない」に比べて「色が無いモノクロの表情が見える」の刺激材料を好み, その理由として「可愛らしい」がもっとも大きく, 次に「女性的」「繊細な」に起因していることが言える。このことから, 鑑賞の際に登場人物の性別, 表情, ポーズ, 小物などの言語的モチーフの情報収集に留まってしまう傾向が再確認できた。

しかし, 刺激材料の後に提示した原作の評価が高い傾向にあったこと, 今回最も影響を及ぼしている「可愛らしい」との相関が高い形容詞から, 「可愛らしい」「女性的」「繊細な」以外に, 「明るい」「暖かい」「楽しい」「柔らかな」に大学生の鑑賞の幅が広がる可能性を感じた。このような大学生の絵画鑑賞についてより一層の理解を深めていくために, 今後も考察を続けていきたい。

参考文献

長瀬容江他, 「絵画印象の研究における形容詞対尺度構成

- の検討」久留米大学心理学研究12, 2013, 81-90
- 長瀬容江他, 「絵画印象の研究における形容詞対尺度構成の検討(2)」久留米大学心理学研究13, 2014, 45-53
- 守本智美, 「よい香りを感じさせる風景画について: 想像力を刺激する嗅覚的絵画鑑賞教育への取り組み」神戸女子大学・神戸女子短期大学教職課程研究, 2022, 102-112
- 李知恩他, 「教員養成課程の大学生と小学高学年生の『鑑賞活動』についての認識のズレ」基礎造形028, 2019, 83-88
- 李知恩, 「構成要素についての説明前後の鑑賞評価の変化」基礎造形学会第33回福岡大会, 2022

(札幌校教授)

